

エンパワーメントのための読書に向けて

広島大学 難波博孝

1. エンパワーメントのための読書習慣

読書習慣とは、毎日決まった時刻に決まった時間本を読むことではない。読書習慣とは、歯を磨いたりお風呂に入ったりする習慣とは異なる。歯磨きはそれを毎日しなければ習慣付いているとは言えないだろう。しかし、読書は毎日強制的にさせられているからといって習慣付いているわけではない。児童や生徒が「朝の読書」の時間に決まって読書をするからといって、その児童や生徒に読書習慣がついているとはいえない。

読書習慣がついているということは、読書する本人が、本を読む楽しみを知っており、本の楽しみ方も知っていること、そして、必要なときに（時間が空いたり、読む欲求が起こったりしたときも含めて）読書行動を行うことができること、であると私は考えている。つまり、読書習慣とは、目に見える行動ではなく、「心の態度」なのである。

ではなぜ読書習慣という「心の態度」を身につけなければならないのだろうか。それは、読書習慣をつけることはエンパワーメントされた生き方につながるからである。

フリードマン (1992) は、エンパワーメントされた状態とは、以下の条件が確保された状態であるとしている。それは、防御可能な生活空間、余剰時間、知識と技能、適正な情報、社会組織、社会ネットワーク、労働と生計を立てるための手段、資金の八項目である。これらの条件が満たされたとき、人はエンパワーメントされた生き方をしているといえるのである。

上の項目のうち、本あるいは読書がいくつかの項目に関連していることは明らかだろう。読書は「知識と技能」「適正な情報」に関連するだけでなく、システム化された「社会組織」やシステム化されていない「社会ネットワーク」への参加へと道を開くものでもある。ある職種を選択しようとする人間がその職種に関わる書籍を読むことで、その職種が作り上げてきた「ネットワーク」への参加を促進するだろう。またある企業に就職したものは、その企業が関わる書籍を読むことで、その企業（＝社会組織）の一員であることの自覚を高めるだろう。

OECD が行っている PISA 調査は、「生きるための知識と技能」と呼ばれるものであるが、その中に「読解力リテラシー」が入っていることも、読書がエンパワーメントにつながることを示している。経済活動を促進することが目的の OECD が、読解力の調査を行うことは、読解力が生きるための知識と技能であり、そのことが経済活動への参加を左右するものであることを理解しているからである。

2. 今だから見えてくる本の利点

もちろん、OECD のいう読解力リテラシーは、短い文章やインターネット上の言語の読解も含めての概念である。また、インターネットのリテラシーも、「知識と技能」「適正な情報」や「社会組織」「社会ネットワーク」への参加に今や大きく関わることは言うまでもない（現在の就職活動では、インターネットができなければ、エントリーすらできない）。

では、現在のようなインターネット社会では読書習慣はつけなくてもいいのだろうか。確かに、読書あるいは本の役割や利点は、以前とは大きく変わってきた。非常に安い金額で情報を摂取したり虚構を楽しんだりできるインターネットは、それまでの本あるいは読書の優位性を低めただろう。しかし、このような社会だからこそ逆に、本の特質が見えてきている。それは、本の持つパッケージ性である。

本の持つパッケージ性のおかげで、本についてのいくつかの利点が見えてきている。その一つは、完結性、つまり、完結した世界を本が持っているということである。例えばインターネットで情報を収集すると、さまざまな信頼性さまざまなレベルの情報を自分で選択していかなくてはならない。しかも収集の限度にも際限がない。しかし本の場合、著者の目によって選択された情報がパッケージされているのである。これほど便利なおもしろいことがあるだろうか。確かに、単一の情報を得るにはインターネットが便利であるが、体系だった情報を一定のレベル一定の信頼性をもって摂取できるのは本が一番なのである。

もう一つの利点は、携帯性である。確かにモバイルパソコンを使えば持ち運びは可能である。しかし、電

気がないところでは使えなくなる。本は電気のないところでも読むことができる。いつでもどこでも読むことができるのは、本の大きな利点である。携帯電話をはじめとするさまざまなツールによって本以外でも小説が楽しめるようになったが、本を持ち運んで読む方ははるかに簡単である。

最後の利点は、質感である。触感といいかえてもいい。デジタル上の情報にも質感は確かに存在する。しかし、本が持つ質感、触感は、まちががなく身体に直接感覚できるものである。人は本を手取ることに酔って、情報を、あるいは物語世界を、文字通り「さわる」ことができる。直接に「さわった」情報や物語世界は、そうしなかったものよりも「脳への刻印のされ方」が変わるとは私は考える。

3. 本の楽しみと本の楽しみ方とを知る

では、そのような利点を持つ本と関わるには、どういうことが必要だろうか。このような本に触れるための「心の態度」には何が必要だろうか。そのために、私は次の二つのことを考えている。

(1) 本の楽しみを「知る」 (2) 本の楽しみ方を「知る」

つまり、読書についての「マインドセット」と「スキルセット」をしよう、というのである。なお、この二つの「知る」は少し異なる意味を持っていることに留意してほしい。

まず(1)の「本の楽しみを「知る」」であるが、これは、本の楽しさ・おもしろさ・ありがたさ・・・を「実感・体感」しているということである。読み聞かせを通して、国語の授業を通して、その他さまざまな場面で、本の楽しさ・おもしろさ・ありがたさ・・・を大人が子どもに「実感・体感」させる場をつくることで、本の楽しみを、心の底に持つことができるだろう。つまりここでいう「知る」とは、「感知する」という意味である。

本の楽しみ方を知らせるのに重要なのは、本の持つパッケージ性の特徴を十分生かすことである。それにはインターネットや携帯電話と比較すると見えやすくなる。ある事柄についてインターネットで調べると本で調べるとではどこがどう違うのか、携帯で読んだ場合と本で読んだ場合とで物語との関わり方にどのような違いがあるのか。そのような比較を子どものときから行うことで、インターネットとは異なる本の特徴が「感知される」だろう。

次に(2)本の楽しみ方を「知る」であるが、これは、本を楽しむための「技術」を「習得」している、ということである。つまりここで言う「知る」とは、「熟知する」ということである。そして、本を楽しむための「技術」にはいくつかあると考えている。

まずは、本を選ぶ技術、つまり「選書する技術」である。本は過去から現在、そして未来と、無限とも思えるほどの数が出版されている。その中から、必要な本を選ぶことは、どうしても必要な技術であろう。多くの情報があふれすぎて今の自分にどんな情報が必要かわからなくなっている現在社会に生きる人間にとって、これは必須の技術である。

もう一つの技術は、「本をまるごと捉える技術」である。この本ではないかなと思って手にしてみる。このとき、私たちはこの本をどうやってまるごと捉えていくだろうか。最初から最後まで読み通すというのは、無技術者である。読み巧者は、本を全て読まなくとも、本をまるごととらえる技術を知っている。その本の特徴や魅力を知るために、次のようなところを見ていくだろう。

表紙・装丁・著者名(訳者名)・出版社・帯・前がき・後がき・著者紹介・目次・索引・・・

このような所を読んで、本をまるごと捉えていくのである。その結果、必要ならばその本を読むことになる。

最後は「本を1冊読む技術」である。これは、本をまるごと1冊最初から最後まで読む技術というわけではない。もちろんそれも含まれるが、自分にとって必要な部分だけを読む技術も含まれている。本は何が何でも最初から最後まできちっと読まなければならないというのは、ある道徳の徳目に過ぎない。必要ならばそうすればいいし、必要でないならばそうしなればいい。大事なのは、必要か必要でないかを見分ける技術であり、必要なら最後まで読むことができる技術である。つまり、「本を1冊読む技術」は、「必要ならばとばし読みがいき、必要ならば最後まで読むことができる技術」と言い換えることができるだろう。

本の楽しみと本の楽しみ方の両方を知っていること、このことが「読書習慣」という心の態度が身に付き

ているということなのである。

4. 「読書習慣」形成のためのトランスシステム

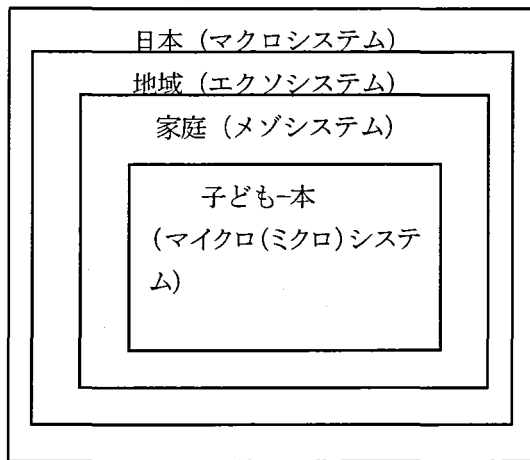
では、本の楽しみと本の楽しみ方という心態度は、どうやって身に付くのだろうか。もちろん、人が一人で身に付くはずがない。外からの働きかけがなければあり得ないことだろう。Bronfenbrenner (1979) は、人間が生涯発達を以下の四つのシステムで示した。

「マイクロシステム(microsystem)」 「直接的な行動場面の中で起こる複雑な相互関係」 「メゾシステム(mesosystem)」 「発達しつつある人が実際に参加する行動場面」

「エクソシステム(exosystem)」 「実際に参加していなくても直接的環境の中の出来事に対する影響を生みだしている別の行動場面」

「マクロシステム(macrosystem)」 「ある文化や下位文化に共通している社会的制度の体系やイデオロギーを橋渡しするようなパターン」

これら4つのシステムは、以下のような入れ子構造をなしていると考えられる。



読書習慣は最小の単位では、子どもと本の結びつき (マイクロシステム) である。しかし、このマイクロシステムには、当然のことながら、家族というメゾシステムの影響は大きい。だから、読書習慣というと、家庭が大事であるということになる。しかし、家庭もその周囲にある地域 (エクソシステム) や日本 (マクロシステム) に取り囲まれ、その影響を大きく受けているのである。だから、家庭だけに、読書習慣という心態度形成を求めるのは酷であり、また不可能なことである。より上位のシステムを変えていくことが必要なのである。

しかし、日本や地域というシステムを変えていくのは容易ではない。上位から変えていくだけでなく、また家庭という下から変えていくだけではなく、これらのシステムの階梯性を乗り越えいく活動が求められる。つまり、子ども自身にも家庭にも地域にもそして日本という国家にも影響を及ぼすような活動である。それを、システムを乗り越えるという意味で、トランスシステムと名付けよう。

トランスシステム活動の資源 (リソース) としては、学校・図書館・さまざまな NGO がありうる。また、読書に関わる活動だから、(児童) 文学研究者・作家・書店・編集者・出版社なども資源となりうる。しかしこれらをざっと眺めてみて気づくのは、これらの資源の結びつきの弱さである。つまり、これらのリソースもがちりシステムに組み込まれており、トランス性を失っているのである。

今後求められるのは、これらの資源を結びつけるコーディネーターの必要性である。特に日本のような「たこつぼ」で人材が育成される社会では、特に必要とされるのである。まずは、学校関係者と児童文学関係者のための合同コンパの幹事になる人が緊急に求められている。

(参考文献)

フリードマン、J. (1992 訳 1995) 『市民・政府・NGO—「力の剥奪」からエンパワーメントへ』新評論

Bronfenbrenner, U. (1979) (1996) 『人間発達の生態学-発達心理学への挑戦-』川島書店

(『HYORON 未満』第10号 (2008) 名古屋児童文学評論の会 から転載)